

奈良末・平安初期の漢詩の研究

——勅撰三漢詩集を中心として——

半谷 芳文

要旨

第一章 勅撰三漢詩集の編纂意義とその文芸観

第一節 勅撰三漢詩集の編纂の基盤・目的と『文華秀麗集』の特質

勅撰三漢詩集編纂の歴史的基盤には、唐王朝を規範とした律令国家建設への志向と東アジアでの国際的地位の確保という政治的志向がある。三集に標榜する「文章経国」的文芸観とは、貞観期の一連の史書の「文苑」・「文学」伝序に主張された伝統的な儒家的文芸観と同質の主張であった。勅撰三漢詩集という漢詩・漢文集の総集編纂とは、国の内外に我が国が「文」を有する律令国家であることを宣言するマニフェストであり、ゆえに収載作品は、唐朝の言語、かつ東アジアに共通する「漢語」による漢詩・漢文でなければならなかった。

『文華秀麗集』は「文章経国」的文芸観の求める作品の抒情とは対極にあるはずの艶詩が多く収載され、それらを束ねる「艶情」の部類も立てられた。この「唯美的」な特質は、「文章経国」的文芸観に対抗しうる、文芸の本質への覚醒に由来する思想的な行為によって形成されたのであろう。

『文華秀麗集』とは、「四季と恋との世界を愛惜する本朝の人々の詩的感性」から編纂された画期的な総集として評価できよう。

第二節 勅撰三漢詩集、及び『懷風藻』体例考

——六朝・唐代の総集体例から考察する奈良末・平安朝漢詩集の特質——

体例とは総集編纂上の具体的な基準や書式である。

『懷風藻』は、個人別に編集し（「以人為次」）、さらに年代の遠い順に配列（「以時代為次」）する。この体例は唐代総集の影響か。作者小伝を付す体例は、梁の蕭統編『古今詩苑英華』・初唐の僧慧浄編『続古今詩苑英華』（佚書）からの受容か。作者名表記には位階・官職（官銜）を記す。姓名に官銜を冠する体例は『古今詩苑英華』・『続古今詩苑英華』や仮称

『翰林学士集』に倣ったか。『懷風藻』の諸体例は序文の「先哲の遺風を忘れないようにするため」という編纂意図からの選択であろう。

『凌雲集』は、個人別に編集し、さらに官位の尊卑により配列（「以官班為次」）する。作者名表記には官銜を冠す。これらは初唐末『珠英学士集』の体例を吸収・保持した体例である。最初の奉勅撰の漢詩集に相応しい体例を、律令政治の規範と仰ぐ唐朝の総集の中から選択している。

『文華秀麗集』は、類題を立てて作品を分類する（「分門編類」）。小伝などは付さず、作者名表記は唐風に三文字（姓一字・名二字）を記す。官銜の記載はない。注目すべきは「分門編類」にした後、「以官班為次」（『凌雲』の継承ともいえよう）によって再配列している点である。これは六朝・唐代に通常見られない体例ある。

『経国集』は、「分門編類」に編集した後、「以官班為次」によって配列しているが、これは『文華』を継承している。

作者名表記では、『文華秀麗集』以外、官銜の記載があるが、この官銜と漢詩文の紐帯を果たしているのが「文章経国」的文芸観であろう。

『懷風藻』・『凌雲集』の第一編纂基準は「以人為次」、第二基準は前者が「以時代相次」、後者は「以官班為次」である。両総集ともに作者名表記に官銜を冠す。これらの体例は、作品を成り立たしめる作者個人を、作品の抒情よりもより意識する詩賦観がある。

『文華秀麗集』・『経国集』は、「分門編類」、さらに「以官班為次」によって配列する。「分門編類」は作品の抒情の「美」を第一に尊重する詩賦観の表れである。「分門編類」の採択は、儒家的な詩賦観から抒情そのものを尊重する詩賦観への画期的な転換・変質であった。ただし編纂の第二基準の「以官班為次」は儒家的な文芸観の表れであり、作者に天皇やその眷属が含まれる状況下では必然的な選択であろう。

『経国集』は「分門編類、再以官班為次」を採るが、『凌雲』・『文華』の単なる継承ではない。『経国集』序文は『凌雲集』以上に「文章経国」的文芸観を力説する。この詩賦観に従えば選択すべき体例は「以人為次」ある。しかし採用したのは類題別編集であり、序文の詩賦観に矛盾する。それは経国性よりも文芸性を尊重するという詩賦観が確立されていたからなされた選択である。この「分門編類」、再「以官班為次」という体例は以降の平安朝の総集に例外なく継承される。『経国集』は「唯美性」という文芸性の尊重、それに整合する体例を平安朝漢詩文総集編纂に確立した総集として、『文華秀麗集』に勝るとも劣らない意義を持つ。

第三節 「文章経国」的文芸観と康頤貞『詞苑麗則』序文

——初唐と共有する文芸観——

勅撰三漢詩集における「文章経国」的文芸観とは、初唐の勅撰の歴史書「文学」・「文苑」伝序に記載される文芸観にほぼ等しい内容である。しかし歴史書の文芸観を詩文総集の序文にも主張・記載するのか。近年初唐の詩文総集・康頤貞『詞苑麗則』の序文が特定（『文鏡秘府論』『南』巻所収）され、そこには初唐の歴史書同様の儒家の教化効用性を説く文芸観が主張されていた。これは「文章経国」的文芸観の標榜が、わが国弘仁期の文芸観の特性を示していたのではなく、タイム・ラグを外せば初唐とほぼ同時代性と同質性を示し、唐朝を頂点とする漢字文化圏の中で、総集編纂における高い達成を示す一明証であったことを示している。

第四節 「文章経国」的文芸観と詩賦実作に関する試論

——奈良末・平安初期と初唐の文芸観位相の差異から——

三漢詩集期の官人詩人が景仰した初唐期には、伝統的な儒家の教化効用性を説く文芸観が復活・主張されたが、実作ではその対極に位置する艶麗な詩が制作され、標榜する文芸観と実作とはほぼ関わりを持たなかった。だが三漢詩集の作品には、数種のジャンルにわたり、先行中国詩とは明らかに抒情を異にする作品——私的な対境に帝徳を賛美・厭戦的な抒情を歌う楽府に督戦的な意欲など——が制作されている。この原因は、中国の場合と相違して奈良末・平安初期において「文章経国」的文芸観が絶対的で唯一無二の漢詩文芸観であり、そのあり方の特異性が強い規範性を生み、それを観念の位相のみに止めず、しばしば詩賦実作や勅撰漢詩集編纂にも強く作用することになったからであろう。

第二章 勅撰三漢詩集の抒情的特質

第一節 『文華秀麗集』『艶情』『奉和春閨怨』詩の抒情の構造

——古楽府「虚構性」の受容から——

「奉和春閨怨」詩三篇は四十句前後から成り、修辞に同字の反復的用法を用いる初唐歌行体の作品であり、「女」の艶やかに美しい心姿を詠じて先行作品には見られない精彩と迫真性を放つ佳篇である。その抒情的特質は、作品内に作中人物の一人称的視点である「女」の設定、「女」による独白、あたかも舞台のような場面設定、時間を逐う展開などの表現手法による。これらの手法は古楽府固有の表現手法であり、それらを吸収・保持して詠作した成果である。同時にこれら三篇は奈良末・平安初期の官人詩人の「虚構性」への共振と

覚醒を示しているだろう。

第二節 『文華秀麗集』「艷情」「春閨怨」詩の比較詩学的考察

——古楽府・初唐の歌行体作品の吸収・保持と排除を通して——

「春閨怨」詩が抒情的特質を形成するうえで、古楽府と初唐歌行体の作品から多くを吸収・保持したが、ここでは何が排除されたのかを明らかにする。

古楽府二篇「日出東南隅行」・「古詩」為焦仲卿妻作 并序」からは「作中人物の一人称的視点」から語られる「虚構による物語」などを吸収・保持、しかし、諷刺、揶揄、滑稽などや「桑摘み女」（『民衆』）の視点は排除した。後漢・宋子侯「董嬌饒」、初唐・劉希夷「代白頭吟」からは「落花」と「娘」の取り合わせは吸収・保持したが、「自然と人事」・「悠久と有限」を凝視することから生じる悲しみは排除した。盧照鄰「長安古意」、駱賓王の「帝京篇」、王勃の作品からは、双擬対・蟬聯体などの修辞、措辞や典故の用い方などは吸収・保持したが、現政治への個人的感懐による憤懣・不偶感は排除した。こうした排除の理由は、詠作の場が「公（晴）の場」であったからである。

第三節 「奉和春閨怨」詩と駱賓王「艷情、代郭氏贈盧照鄰」

——初唐歌行体作品に対する同質性と差異性、

あるいは嵯峨朝「奉和春閨怨」詩の独自性——

「奉和春閨怨」詩三篇と駱詩「艷情、代郭氏贈盧照鄰」は多くの共通性が認められるが、ここでは両篇の差異を明らかにする。駱詩は「女」の苦悩を、「奉和春閨怨」詩は「女」の艷美を詠じる。駱詩は実録、あるいは実録風の「物語」によって現実生きる棄婦の憂悶を訴え、「奉和春閨怨」詩は虚構の「物語」によって平安詩人の憧れる艷婦の心姿の美しさを描く。それらはまったく対照的であった。「春閨怨」詩が示した駱詩との対照性——「現実」と「虚構」、「女」の懊悩」と『女』の艶やかな美しさ——は、詩制作における制作の「場」の相違——前者が「個」・後者が「集団」——を示し、最後には平安人の独自の文芸的感性の発現を示すものであろう。

第四節 『雑言奉和』所収「落花詞」考

——『文華秀麗集』期の抒情的特質について——

『雑言奉和』所収「雑言奉和聖製江上落花詞」五篇は、初唐に盛行した七言（雑言）古体詩に倣い、日・中詩賦における重要な詩材「落花」を詠作対象とする。作品は前部において落花を詠じて耽美・唯美的であり、後部において御製を称え嵯峨帝に讃仰を示す典型的な奉和詩の表現を取る。ただし五篇は自然と人事の対立という中国の伝統的な思考に発

する慨嘆を抒情の中核に取り込まない。嵯峨詩壇では落花の婉麗な美態を歌うばかりである。その理由は、「文章経国」的文芸観、制作享受の「場」、四季と恋との抒情を愛惜する日本人生得の詩的感性の三つが作用したことにあるだろう。

五篇の内容は落花における「美」・「麗」の感動を基にするが、この「美」・「麗」こそ約二年前に撰進された『文華秀麗集』に、「艷情」とともに志向された抒情の特質であろう。

第五節 『経国集』『重陽節神泉苑、賦秋可哀』考

——相異する「悲秋」への志向性——

嵯峨御製及び応制八篇の賦は、六朝の駢賦に倣い、最終段落は応制的な表現を含み、秋景をきわめて具象的に詠じている。秋景を人生衰残の「興」として詠じる中国悲秋文学、たとえば宋玉「九弁」や潘岳「秋興賦」と同質の作品ではない。

各賦はすべて語句・表現の結構・構成にいたるまで西晋・夏侯湛「秋可哀」の賦を吸収・保持している。その理由は述作された場が集団の場であり、同時に当時標榜されていた「文芸」観が作用し、相応しい詠作内容が必然的に選択されたからであろう。

補説 「奉和春閨怨」詩出典考、及び詩賦制作と『芸文類聚』について

朝野鹿取「似登隴首腸已絶、非入楚宮腰忽細」、菅原清公「庭前見舞鸞常顧、楼上吹簫鳳未臻」、巨勢識人「片時枕上夢中意、幾度往還塞外途」の各聯の内容表現は、小島憲之が指摘するように『芸文類聚』の範囲に吸収・保持の源泉を限定できるものではない。

こうした「春閨怨」詩の例や当時の書が卷子本であることも考慮すれば、勅撰三漢詩集は『芸文類聚』以外の総集・別集からも、多くの作品を吸収・保持していた可能性が高い。

第三章 本朝文章生試における

貢挙進士試の雑文(詩賦)の試験の受容と展開

第一節 文章科新設と文章生試に関する基礎的考察

文章科が新設(神龜五年[七二八])されたのは、詩賦の制作が国家経営に関わると認識され、実務の決裁ばかりでなく、詩作の伎倆も兼ね備えた官人を育成しようとしたからであろう。

文章生試は、課試(式部省の任官登用試験)中の秀才・進士の受験生を文章科の学生として選抜する試験。進士の試験は詩のみ、または詩もしくは賦の試験と対策二篇と帖経、これは唐・天宝年間末に確定した貢挙進士科の試験とほぼ一致する。二者の相違は唐朝では詩(五言排律詩)と賦(律賦)がともに出題されたが、本朝は詩のみの出題であること。不が出題されていない理由は、律賦作成の困難さからであろう。日中両者の受験生の準備期間に

は開きがあり、試帖の出来栄えを単純に比較してはならない。

第二節 『経国集』試帖詩考

——試卷式と程限から考察する奈良末・平安初期の文章生試——

『経国集』試帖は、詩題、つづけて小字双行で程限を記すという書式である。『白氏文集』所収の試帖に同じ。さらに『礼部韻略』付載「韻略条式」の「举人書写試卷式」に比較してもほぼ同じであり、『経国集』試帖の詩題と程限の書式は、少なくとも中唐期の試卷式と同様である。『経国集』試帖の題「賦得く」「得く」は、試験時に採題が行われたという見解は誤りである。試帖の題「賦得く」「賦く」「詠く」「得く」の示す意味は、試験で出題された詩題による詠作という意味である。唐・宋の程限と相違して、『経国集』試帖には韻と詩型以外の制限を課す例が見られる。唐代には例を見ない七言詩が出題された理由は、漢詩が母語による表現様式ではないため、五言詩と七言詩の表現感覚の差異が理解できないという内在的な理由にあるだろう。

第四章 平安朝七言排律詩盛行の淵源としての勅撰三漢詩集

第一節 平安朝七言排律詩の盛行

——際立つ唐代との対照性——

唐代(約三百年間)における七排詩は七十七首、唐詩全体の〇・二％であり、制作は絶無と理解してよい。平安朝では、現存する総集・別集、公卿日記などの古記録類、『日本詩紀』を調査すると、二百六十六首あまり。平安朝の総詩数の八％を超える。さらに平安朝では考試に七排詩が出題され、平安中期までの総集・別集に散逸したもののも少なくないので実数はさらに多い。平安朝の五言詩(古詩・絶句・律詩・排律)が詩全体の一〇％余りを占めるが七排詩はそれにほぼ近いほど制作され、偶発的に制作された詩型ではなかった。平安後期には詩人のほとんどがこの詩型の作品を残して唐代とは対照的な実態であり、表現様式として充分に「自立した詩型」であったのである。

第二節 平安朝七言排律詩の生成

——「文章経国」的文艺観に基づく文学営為の一つとして——

本朝七排詩の最も早い制作例は勅撰三漢詩集に見られ、九世紀初頭には作成され始めている。唐代の先行七排詩が平安朝七排詩の生成に直接影響を与えた可能性はないであろう。七言排律詩は、奈良末から平安初頭にかけて五言・七言の今体詩律が修得・確立される中で、五言排律詩を習得しながら中唐の七言詩隆盛の影響を受け、五言律詩と五言排律詩

との関係から七言律詩に対する詩型として誕生したのであろう。その生成は「文章経国」的文芸観によって保障された作詩への旺盛な意志に支えられている。先行作品の吸収・保持のない中で七排詩の生成を捉えれば、『文華秀麗集』『艶情』の設立と同じく「一種の文芸的創作」として評価しうるであらう。

第三節 平安朝における七言排律詩の普及

——文章生試への出題を通して——

七排詩が平安朝に一詩型として定着した注目すべき原因は、文章生試などへの七排詩の出題であらう。省試（文章生試・擬文章生試）、学問料試などに出題された詩型には、七排詩が五排詩に次いで出題時期に偏在もなく、断続的に出題されている。

道真の例から文章生試の受験生の様子を推察すると、五排詩とともに七排詩の制作練習を重ねている。こうした受験準備は他受験生も同様であり、受験準備を通して七排詩制作に習熟し、平安漢詩人が七排詩を制作する基盤が醸成されたのであろう。

文章生試が平安朝漢詩の制作に与えた影響は極めて大きい。それは唐代貢挙進士試の場合と同じであらう。

第五章 奈良・平安初期の日本漢詩における押韻と韻書

第一節 勅撰三漢詩集押韻考

——韻書の利用と韻律受容から考察する奈良末・平安初頭の詩賦——

三集所収の今体詩の中で『切韻』（『広韻』）の規定に合わない押韻を唐代の古詩通押韻とか、ケアレス・ミスと解釈した従来の見解は誤解である。初唐にも『切韻』に合わない特殊な押韻例が見られるからである。『切韻』に合わない理由は隋代に成立した『切韻』に吸収・統一される以前に使用されていた六朝の数種の韻書を、初唐では未だに使用していたからである。六朝韻書は『切韻』と韻分類が相違する撰があるので、『切韻』の規定に従った唐代一般の押韻から見れば破格、あるいは古詩通押韻などと誤解したのである。三集の『切韻』に合わない特殊な押韻例も、初唐の破格の押韻と同じく、六朝の数種の韻書の使用が原因である。一方『切韻』に合う押韻も多く見られる。つまり勅撰三漢詩集の押韻では六朝の数種の韻書と『切韻』とが混用されていたのである。

奈良末・平安初期はほぼ中唐期に当たるが、『切韻』の規定に従って押韻するという詩律がまだ完全に行き渡らず、いまだ六朝・初唐期の影響下にあったのである。

第二節 『懷風藻』押韻考

——六朝韻部の分類・『切韻』及び日本漢字音から考察する

日本漢詩生成期の押韻——

『懷風藻』の押韻について従来「詩韻」（平水韻）に照合している場合が多い。これは誤りであり、六朝の数種の韻書（『切韻』とは韻部分類が相違する）と『切韻』（『広韻』）から検討しなければならない。六朝の韻部の分類は王力・周祖謨の先行研究に示されている。

『懷風藻』の押韻のほとんどは六朝期と『切韻』の韻部の分類に適っている。漢詩を作成し始めてわずか一世紀の間に、押韻律が早くも普及していたのである。ただし唐初に始まる『切韻』の韻部の拡大（同用）はまだ伝来していなかったのではないか。

『懷風藻』には、六朝の韻部分類と『切韻』から見ても、破格とする以外にない押韻例がある。その幾つかは、当時の日本漢字音「吳音」による押韻と考えられる。これらは漢詩における押韻律理解の未熟さを示しているが、漢詩という新たな表現様式に魅せられ、それを取り入れ同化しようとした過程の一試行錯誤の跡、と評価したい。